

# ミステリ読書案内

2022. 9. 14 発行元

第396号 伊藤 剛

<https://mystery-dokuan.com>

## 片岡翔『その殺人、本格ミステリに仕立てます。』

7月に光文社から出版された片岡翔の『その殺人、本格ミステリに仕立てます。』を取り上げる。今まで読んだことのない作家だが、綾辻行人の推薦文のついて帯についつい引きずられてしまった。さて、出来は…。

### 「本格ミステリ」に…

『本格ミステリ』という言葉に魅かれてしまう…。本書の作者・片岡翔は映画監督の仕事をしてきた人のようなのである。ミステリ作家としての実績は本書が最初の作品になるのだろうか？

綾辻行人の帯の言葉に「周到に作り込まれた本格ミステリ」とあって、かなりマニアックな作りかと期待させられる。カバー裏の絵にも「殺人計画料金表」が印刷してあって、読む前から楽しみが膨らむ。

### クローズドサークルの出来事

最近多いクローズドサークルの舞台。最初に「登場人物一覧」があって、開始直後には「天狗館間取り図」が出てくる。これが「本格ミステリ」の王道。

主人公は音更\*風(ふう)という若い女性なのだが、物語のオープニングは今の亡きミステリの帝王・鳳凰我又の作品にちなむ天狗館での大学ミステリ研の集まりの話になっている。つまり、「天狗館」は長めのプロローグみたいなもの。

やがて話は進み、新潟県の日本海に浮かぶ孤島・鬼島の「鬼人館」に鳳一族のメンバーが集合し、本編に入っていく。「鬼人館間取り図」は更に丁寧になる。亜我又の子ども四人の関係は良くない。主人公の\*風は雇われたメイドの役目なのだが、一連の出来事に自ら深く関わっている立場。そして一番奇妙なのが「殺人計画」を請け負っている影の人物。「本格ミステリ」の形に事件を展開させようと隠密行動を展開していくことになる。

### 二重、三重の思いがけない展開

\*風がドジを踏んで、本当は殺さないはずの「殺人計画」がどんどん崩れていき、連続殺人に発展していくところが本作品の面白いところ。島に閉じ込められ、携帯電話も止められ窮地に。一人一人の動きの細かい部分でのアリバイだったり、密室のトリックだったりと緻密な組み立てになっている。

一度解決が成されたようにして、更にその先のどんでん返しも用意されている。作者がストーリーを練ただろう努力の跡がうかがえる

### 「本格ミステリ」増加傾向

昨年あたりから「本格ミステリ」の作品が増えてきているような気がする。私のこの『ミステリ読書案内』でも昨年秋の知念実希人の『硝子の塔の殺人』以降、斜線堂有紀『廃遊園地の殺人』、鴨崎暖炉『密室黄金時代の殺人』、朝永理人『観覧車は謎を乗せて』などを取り上げている。とても嬉しい流れである。他にも「本格ミステリ」らしき雰囲気の新刊が出ているようで、今年の年間ランキングの結果が楽しみである。

出来栄えと言えるだろう。最初の一作としては十分に満足できる。

### 次作に期待する部分として

ストーリーを複雑にし過ぎたと感じる部分もあって、前半では読んでいて描写不足と思う箇所があった。後半では論理構築の流れにぎくしゃくしたもどかしさのような箇所もあった。そして、全体で言えば、読後に残るインパクトがやや弱いようにも感じる。殺される4人の人物像の部分だろうか。事件の謎の強調だろうか。小説としての仕上がりがレベルアップすれば更に高評価になるのではないだろうかと思う。本作品は、アイディア部分が先に立っている印象である。

## 今邑彩『時鐘館の殺人』

1993年中央公論社C★NOVELS。

この『ミステリ読書案内』第390号で「犯人当て・読者への挑戦」について取り上げたが、そういえば今邑彩の短編にも「問題編・解決編」がついた作品があったはずと思い出して、この『時鐘館の殺人』を取り上げることにした。今邑彩は本格謎解き要素の強い作品を作り上げる作家である。本書は6編収録の短編集。

巻末が表題作になる。ミステリー関係の作家や評論家などが集まった下宿屋の時鐘館。二階の部屋の図面が入っていて、なおかつ外は雪が降ってくる。雪の山荘の密室と思わせながら実は違う展開。夕食後、部屋に籠ったはずの作家・大楠潤也が担当編集者に書き置きを残したまま消失。次の日の朝、外の雪だるまの中に死体が発見された。関係者の前夜の動きが確認されていき、時鐘館の狂った時計も役目を果たし、アリバイ崩して犯人を絞っていくように見えるのだが…。問題編。そして解答編。皆が集められ、徐々に謎が解決に近づく。「あれっ、こんな単純な解決でいいのかな？」とっていると、更にどんでん返しが待っている。オーソドックスな本格ものと見せ掛けながらも、もう一段工夫が凝らされたミステリ。読みやすく好印象である。